



昇平鼓暖

三府滕栗毛

茅貳編

松村樞雨著

杏齋吟光画

島解堂板

65

60

55

50



松村楼雨茗

A786
2

三府むざらうぢ

松むし梅う蒸

式編

上の巻

まきるひ光重



高福寺

書様

開化ゆく代の不羈自由。い七里も僅一時間。新橋うけて横濱の
遠きと厭を灰中等の椅子よ並べし膝栗毛。开も乗込の滑
稽言ハ野毛と傳ひて伊勢山の軒と列ねし水茶屋より。冷たい
汗を拭き。絞りにて勿し馬車道は其争論と一洗の銚子の
わらわめ離盃乃腰掛。酔と調子の都左若刺と。二編乃結局と
做しうひ吉の回らぬ作者の出鱈目。亦、誤りて序をふらん

明治十四年八月

櫻雨山人戯誌





おん
「おん」
おん
おん
おん

おん
おん
おん
おん



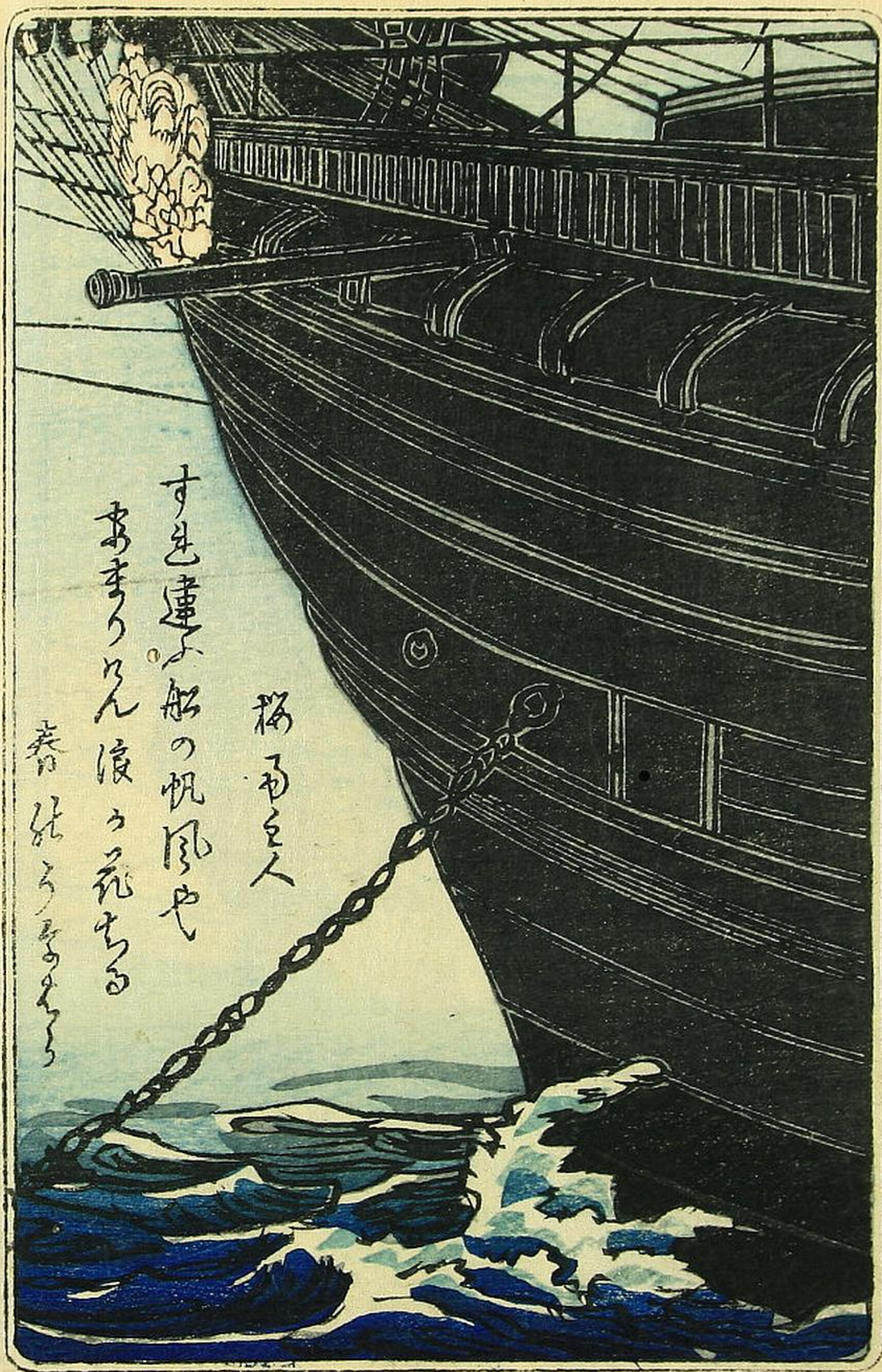
面次郎

ふし、夜の月と
おんすにめまきまれ
眠るみるゆる門のまき柳

おん
おん

おん
おん
おん
おん

おん
おん
おん
おん
おん
おん
おん
おん



移る人

すは運ぶ船の帆風や

あまうらん浪う花ちる

春ははるるるる

三編のついでに 恠てまゝの松屋の面は多分五七

あさ目の引窓一さうのわが長屋の女府の

井戸をさめて近所の湯を花に

まのす十何とさるるはよりえ

騒りて確し起出さるゆゑ

あふせし盤盤と雨り

片付の船版を仕舞ひ

し何れは正年まゝ

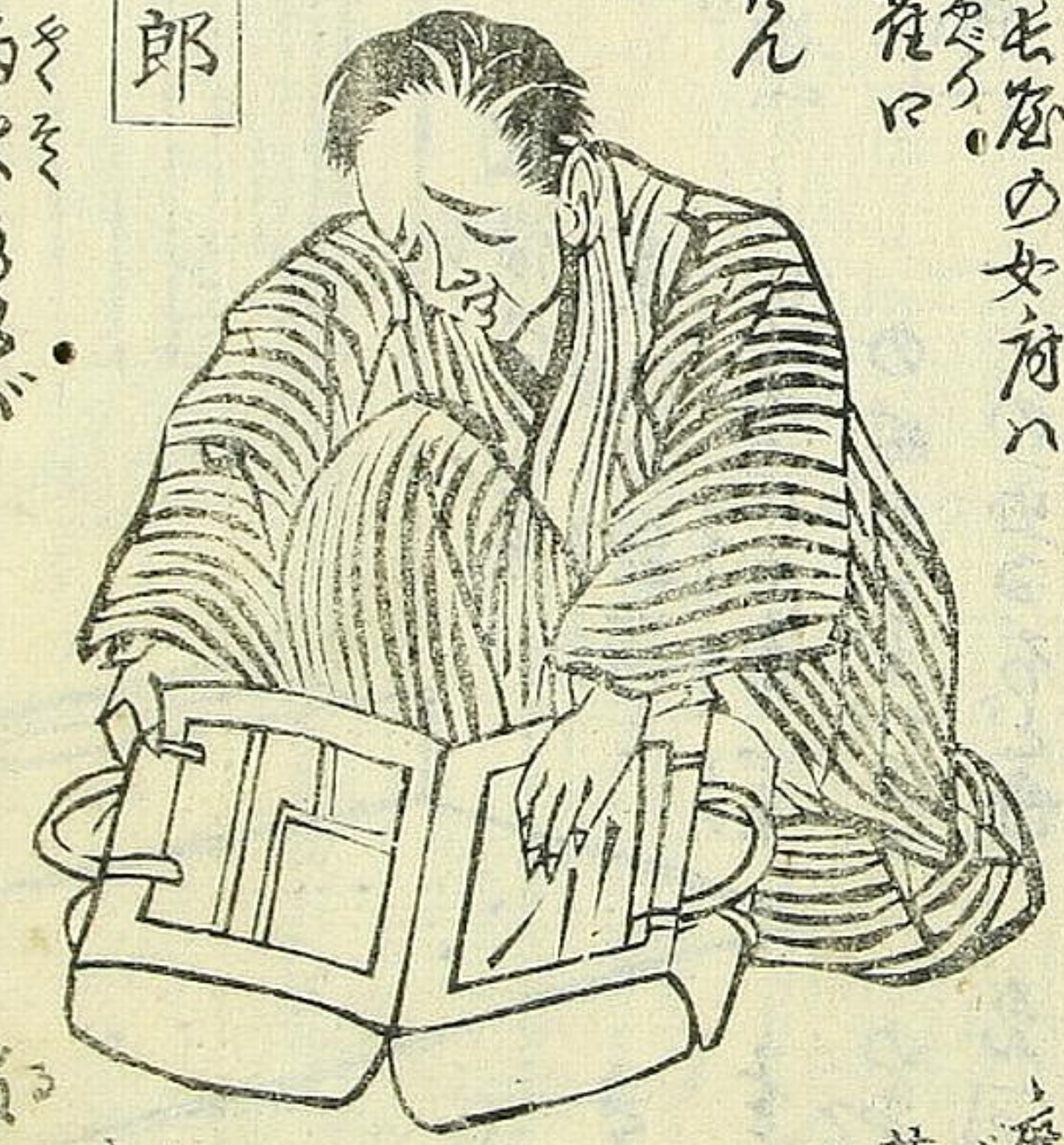
のとより今日横濱

と出帆の蒸気舟のり廻り約束するが

例ものなまに引之て手むくはるの

始末をばし身も手むく提華をん

面次郎



協極今ふ

麻らふの

草履の

準備の

出来

向ふ

三かん

あつり

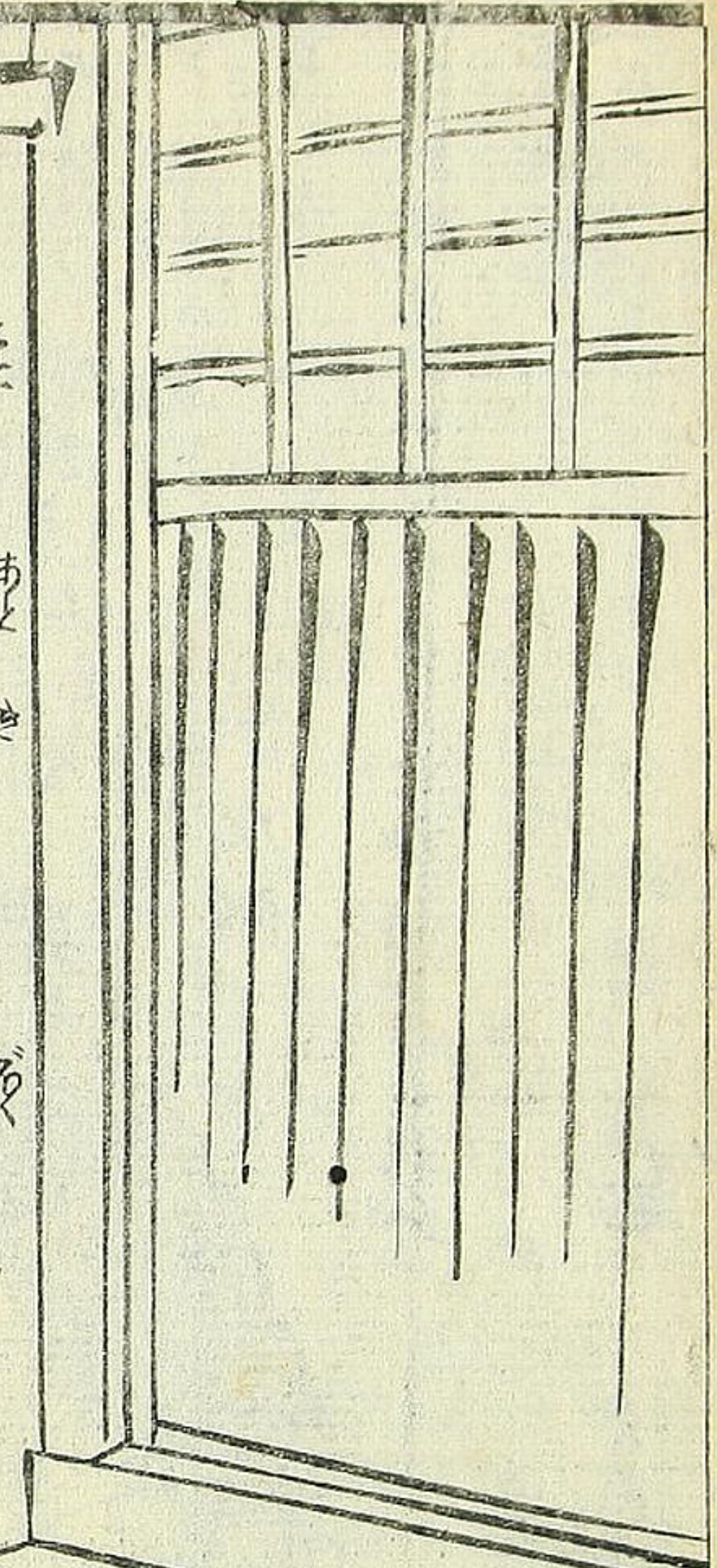
あつり

あつり

あつり

あつり

次へ



十二町の奔車
 小舟とむ
 絳衣と作小舟のき
 ありて八町極の住居と
 出くまが新志しの停車場
 意のやあつと
 僕らんき
 蒸流く新海と
 の向方うらべエス
 の出るちと合
 丸アツ
 され換とも
 西降へ
 飯令大
 合 花房

面次郎



面次郎
 七光岡
 今更
 のやう
 ろ風
 もあ
 是れ
 是れ
 大津への
 出しても
 一歩ごうのうき
 さうかぬ大津へ
 出ても
 大風とま
 出ても
 合作てあへん後
 合 花房

田苗七

るる 三三 航海と後悔と

目トやうふのふやうがある

者ウめんウニヤウウウ

叔権油ウウウ

戒ハカウウウウ

等の儀ウカ

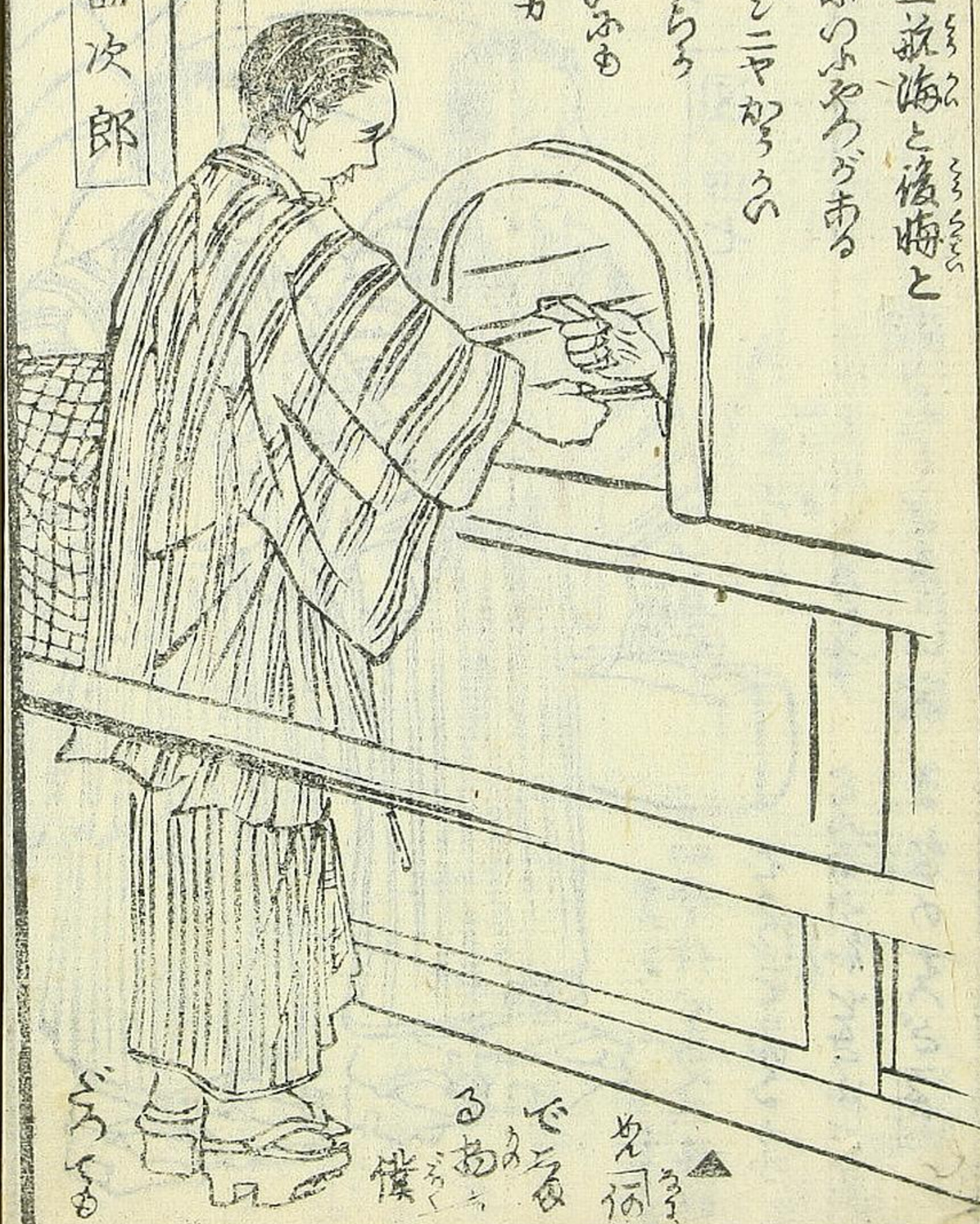
又ハカウウウ

門院ウウ

南真ウ

面次郎

小付ウ



外 人 接 一 百 万 篇 由 休 々 其 甘 め 入 肉 的 丹 一 日 後 悔 次 へ

ちウアウ

事末

盛ガ山の

如クサ

アウ

あまき

其見ガ

幾分ウ

付ウウウウウウウ

学問小通

トねウウ

航海とると不便ウウウウウウウ

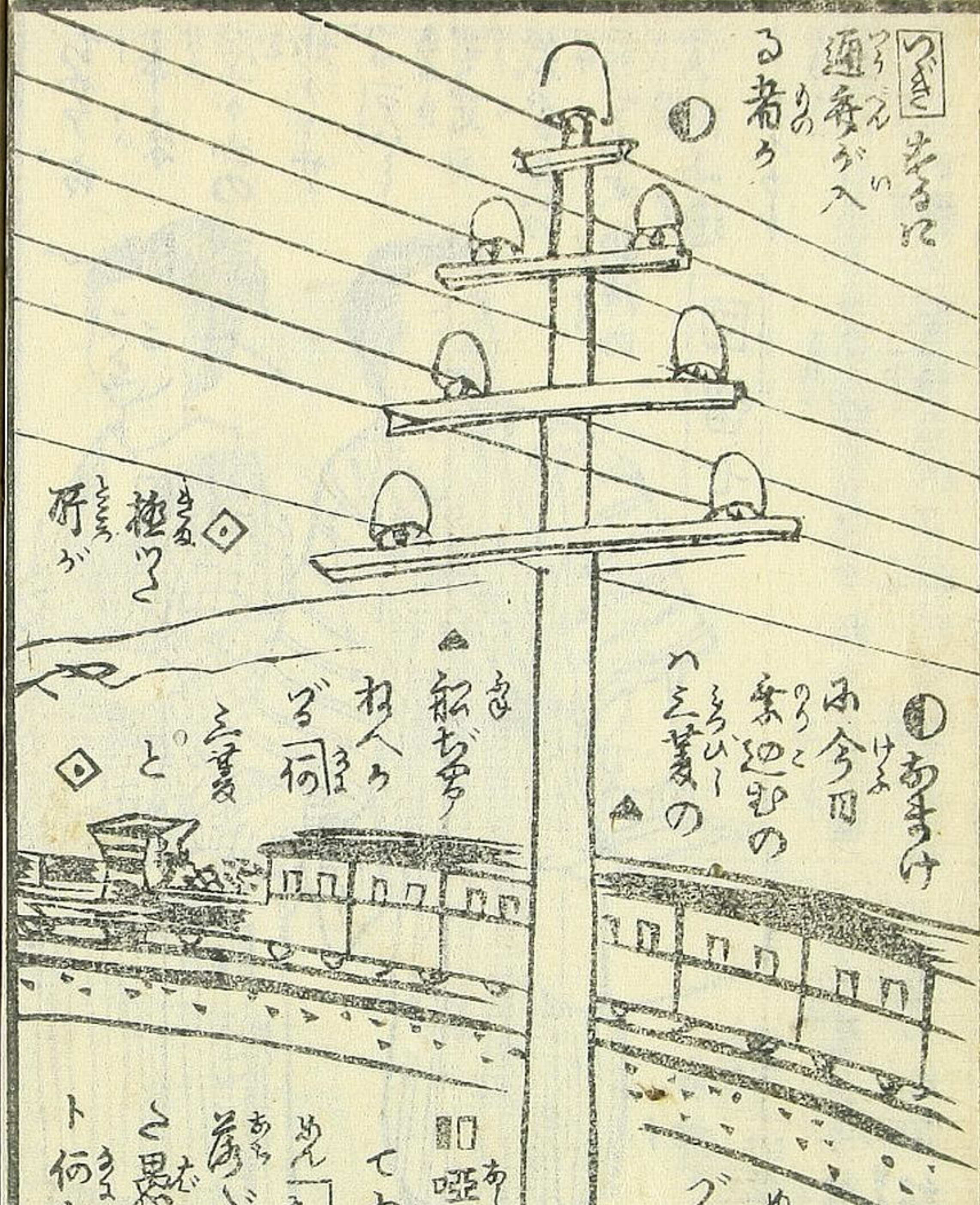
先生の後小

留七



と暮ウウウ 其甘め入肉 的丹 一日 後悔 次 へ

つぎ 来るに
通ずるが
る者う



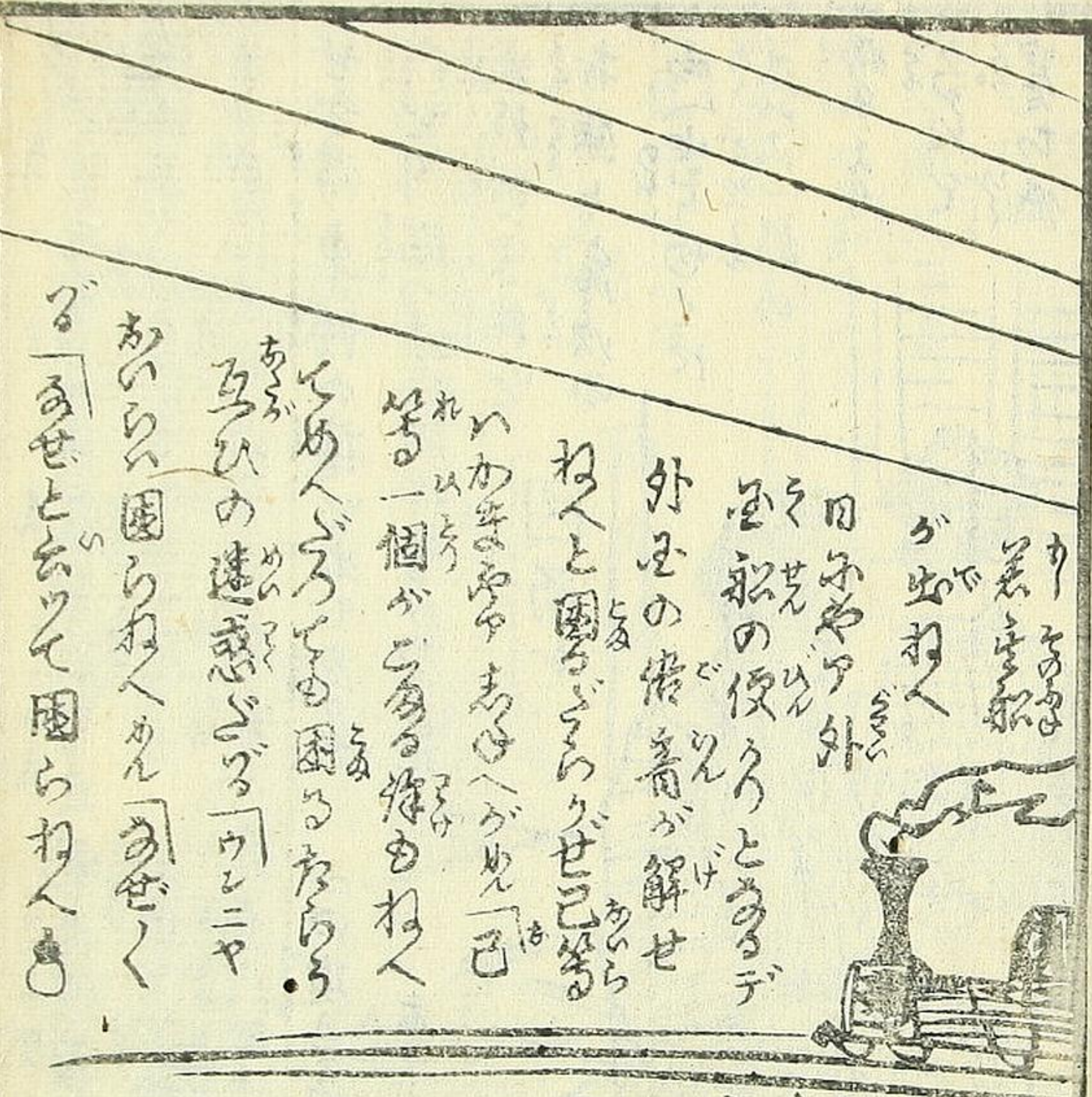
極う
所が

あまけ
ふ今四
余迎むの
ハ三葉の

あつひが
あらや
れどいするの
る「あまき」
ねんが

船ちや
ねんり
る何
と
と

市と社
てぬるのよ
見「あやうそんま
あつひらうと
と思ふ
ト何う解らぬ

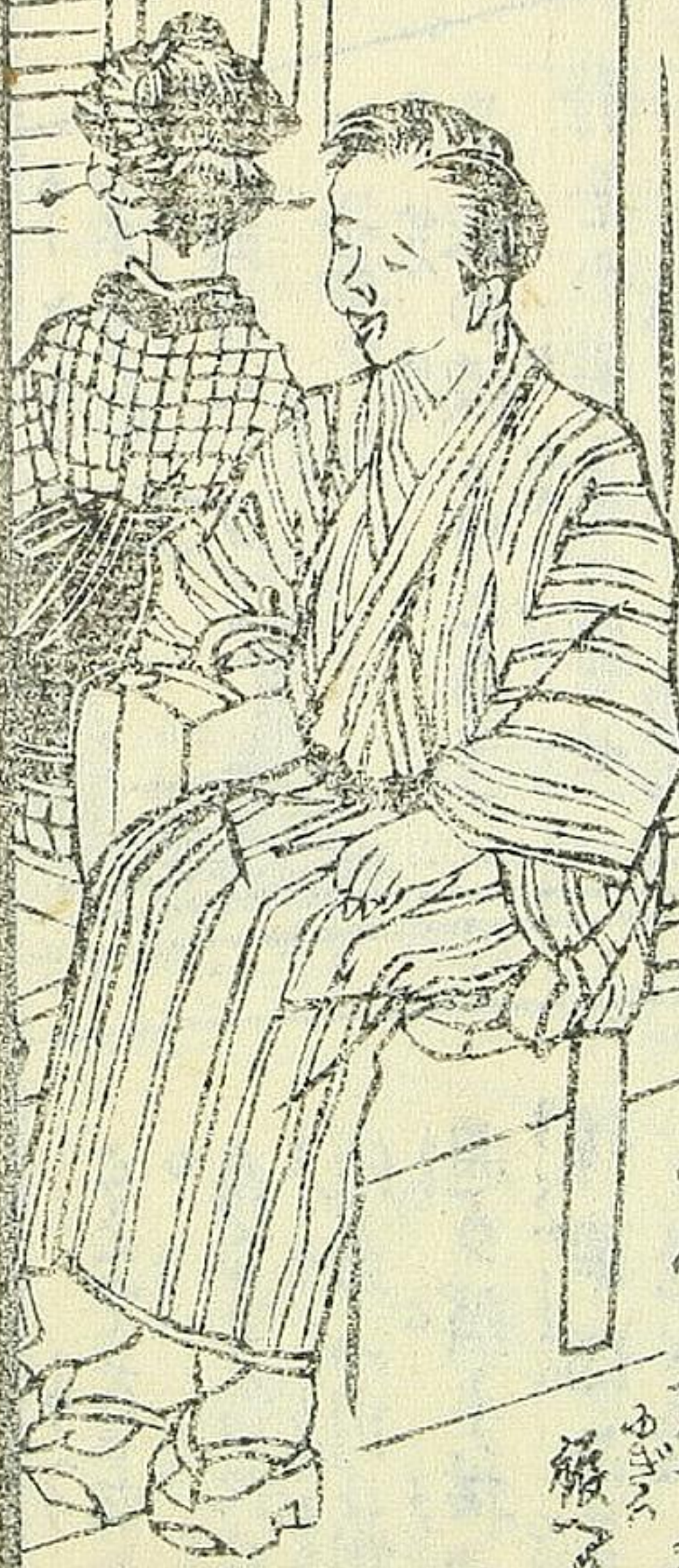


かき
美ま
が出れ
田んぼや外
と船の便うとあるデ
外必の備着が解せ
ねんと園さうせ
いかなやあひへが
等一個か
てめく
互ひの迷惑
あいら
る

ことを
飛らうら
流車ハ川
通の
停車場
切符を
我が
行く
各個ハ
の周
といふ
次へ

門七川 橋つるひお侍勢山のうら
 歩み 知る格と
 お膳り 席次お
 山一 堂りゆくに
 藤い 新一 敷の
 姉め あり
 多の ねと
 富の ち低

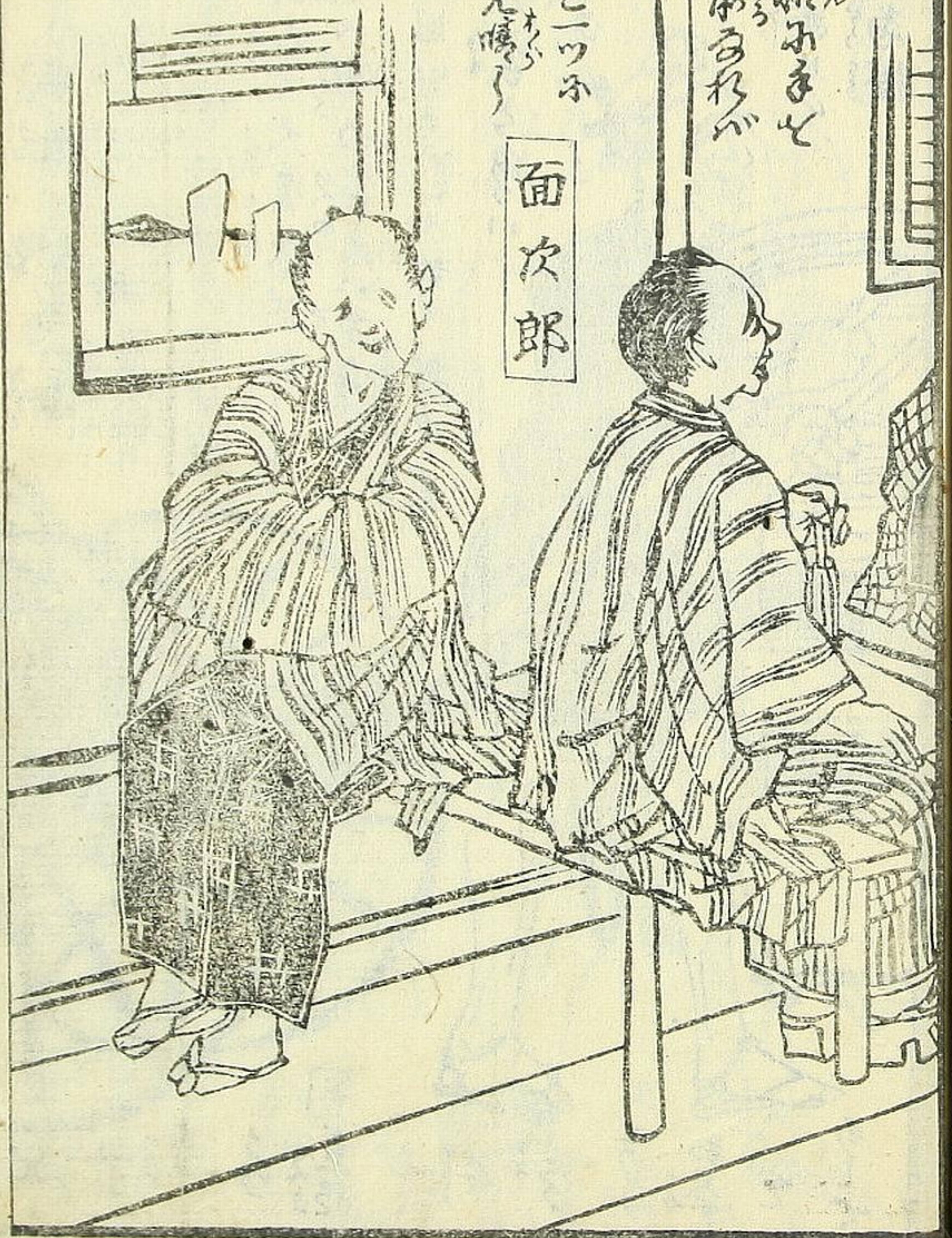
因苗七



高港 豪家の 外 在る 殊に
 風 雅と 格の 家 長 あり あり
 津 奈川 藤 令の 友 宅 徳 有 東の 岩 邸の
 山の 頂 あり あり 津 美の 文 柜
 ち しく せ ぬ 社 の 内 外 の
 水 系 屋 邸 及 揚 馬 店
 ちん ぶ 新 と 巻 ぶ ぶ
 藤 不 次 八

きと ぼめ
 多の 開 拓 あり せ
 藤い 新一 敷の
 横 演 中
 の 徳 系 と 一 つ お
 実 せし 兄 鳴る
 あり 娘の
 中央 右
 左の あり
 松と 櫻
 と 種
 子

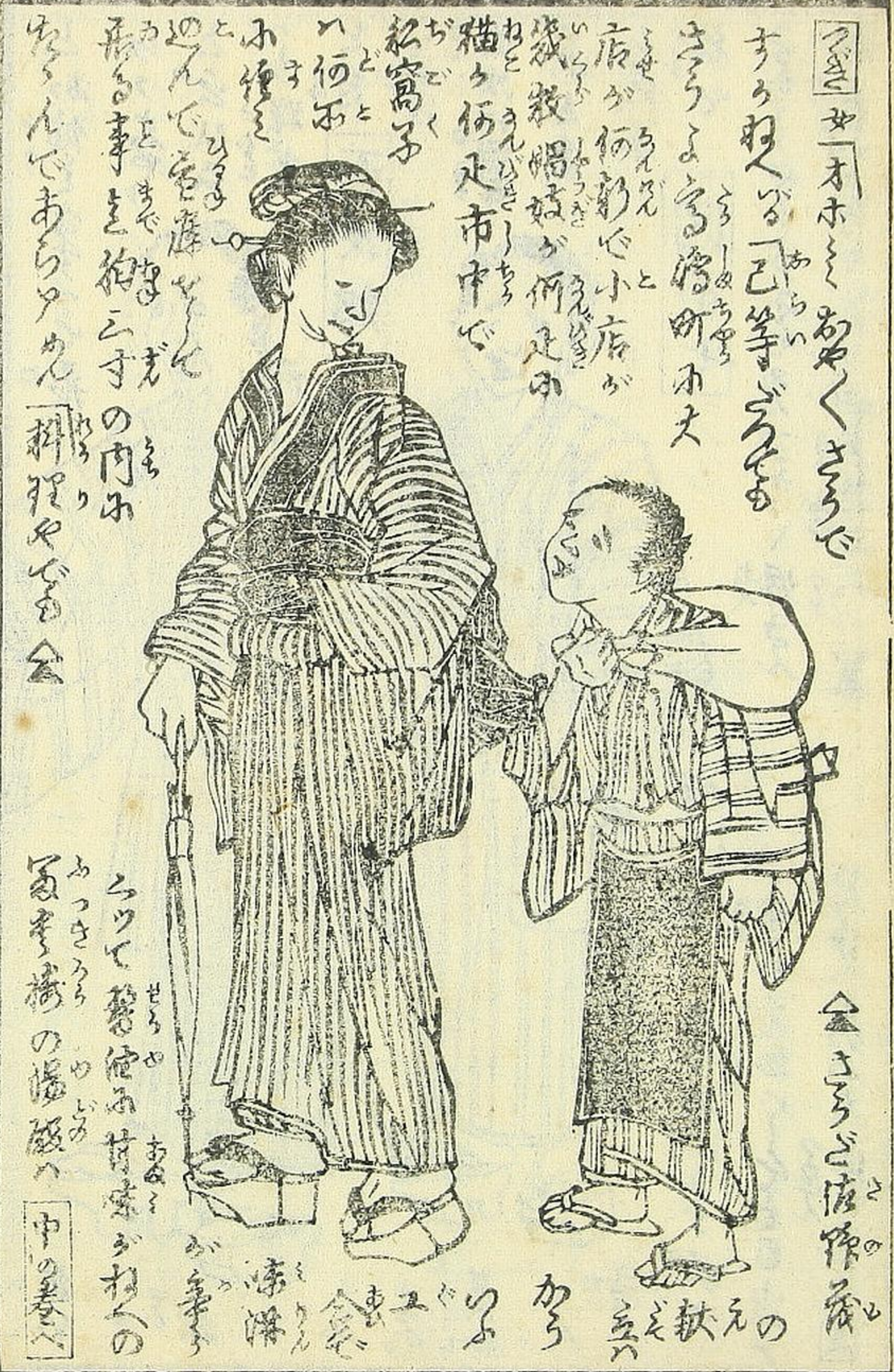
面次郎



芳川春壽岡本起泉綴

川上行義復雙奇談 二編	幻阿竹尊聞書 三編	澤村田之助曙草紙 五編	坂東彦三倭一流 三編	白菅阿繁顛末 二編	嶋田一郎梅雨日記 五編	其名し高橋毒婦之阿傳 東京奇聞 七編
-------------	-----------	-------------	------------	-----------	-------------	--------------------

出版人 綱島龜吉	編輯人 岡本勘造	新板物不教澤山	御所櫻梅松録 十五編	花岡奇縁譚 三編	色吉原安里系符編 三冊
----------	----------	---------	------------	----------	-------------



新編二上

九

武
編
毛栗藤府
こ
鼓



三府

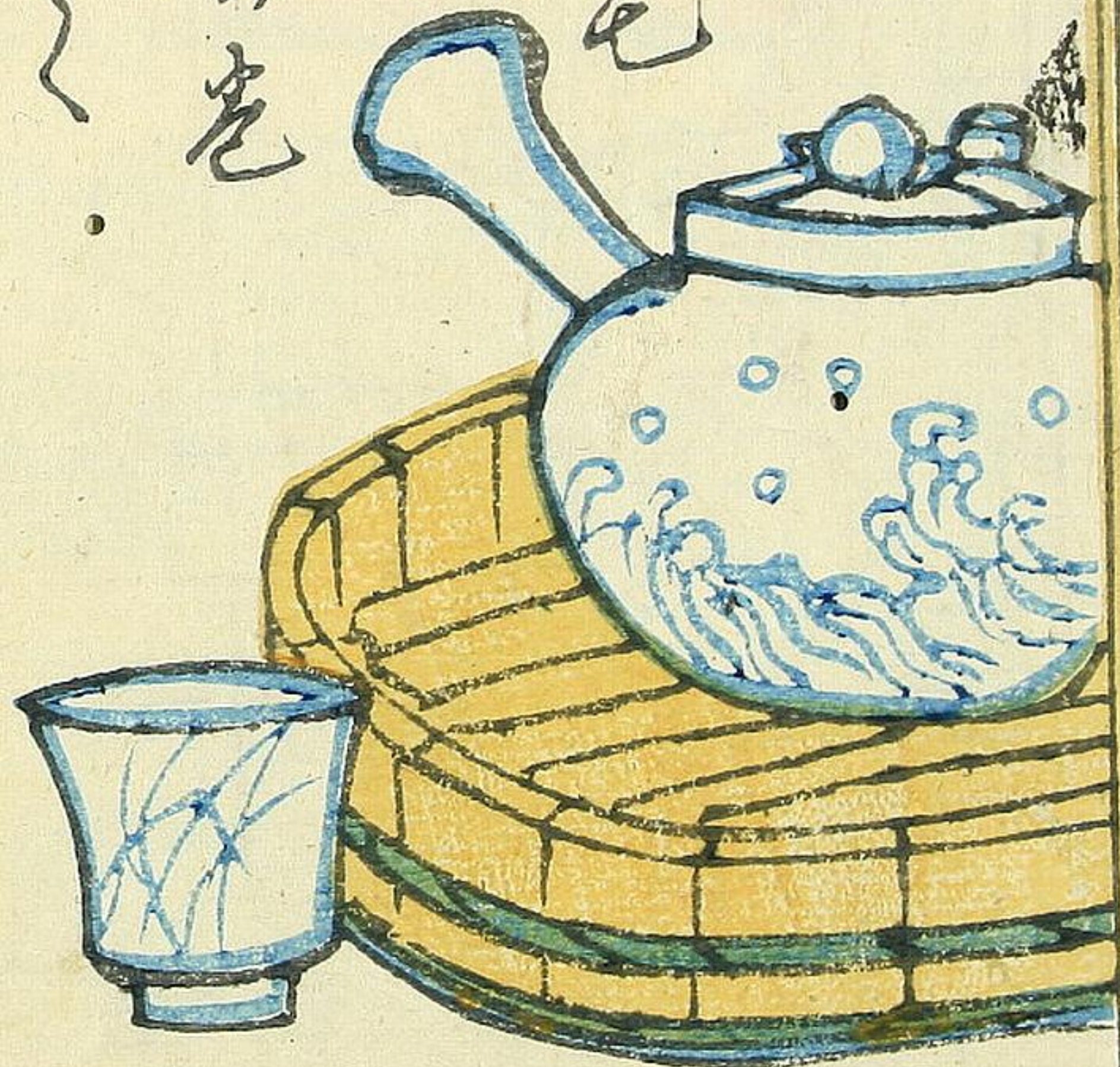
猿栗毛

式強

申の光

揺両せし〜

今光画



島鮮文庫

上より下まで
 ちひさくらツでもあふあね人の尻の
 火きの何家の女中口の掃除が痛めてあつた
 新ねんま心細くねんりのねんと書達を月利
 達之を考あやア思ひませ女才お〜 忍免
 巾着のま〜 那の
 如ハ
 いろも
 そ〜
 巾着の毛をかきさぬお鬼角其致と
 申しま〜して住ませんヨあ〜、元「ア〜」
 女「だうねん婦さん〜このがお客様候の
 奉と田舎のり〜こと〜ん〜このハ〜」
 田舎の女

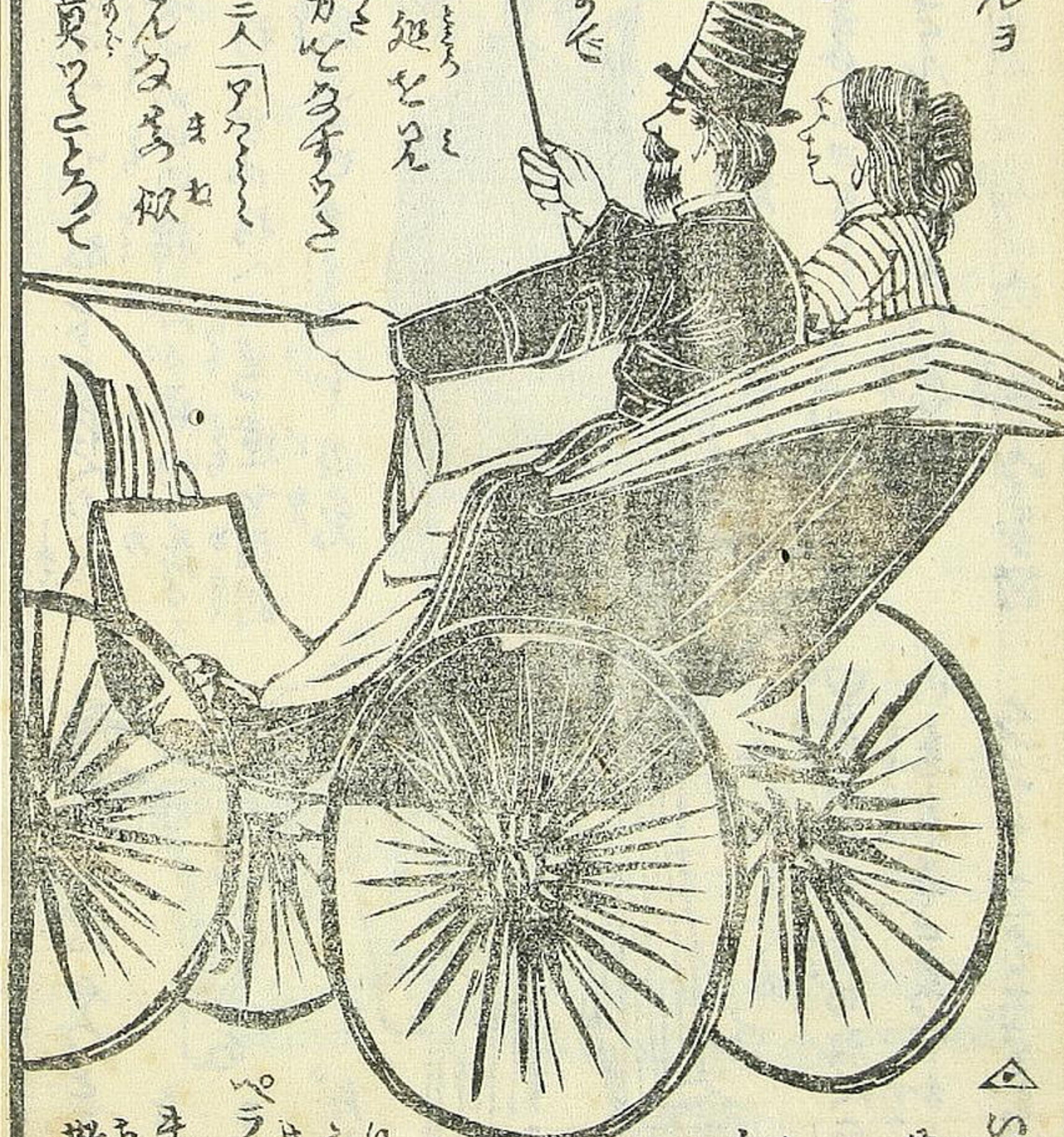


田舎の女
 の奉と田舎のり〜こと〜ん〜このハ〜
 申すは「〜」
 女「だうねん婦さん〜このがお客様候の
 奉と田舎のり〜こと〜ん〜このハ〜」
 田舎の女

つきありませんヨ
ごみんごく

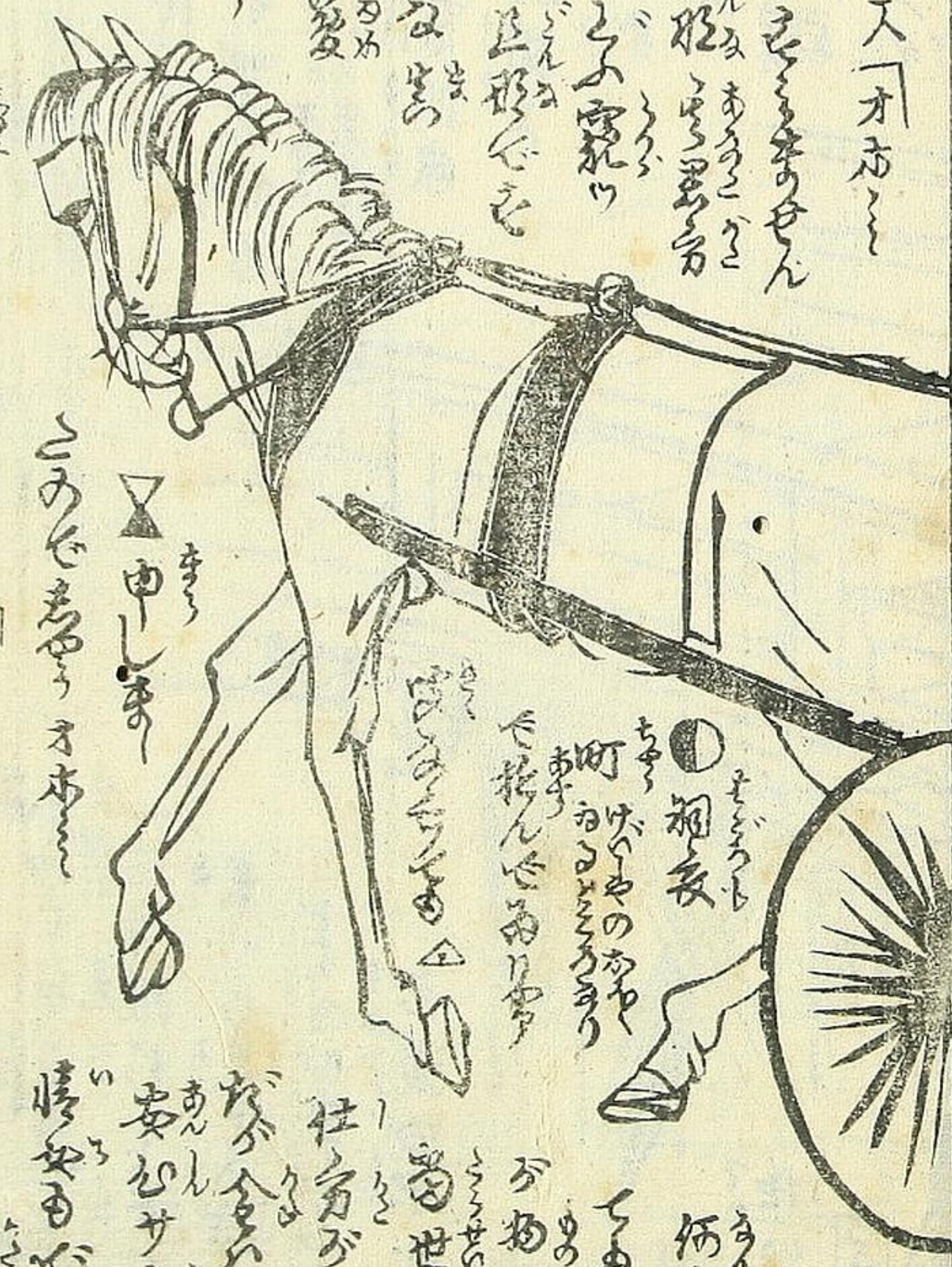
かそきだつても
お客さぬハ降
妻の年や
船妓の奉まを

知りて入りあはる知むを
ますと称まふかむます
宵心あやうねく三人
船をさうめんをまぬ
あんとら成ふ買つとらて



事考二
船妓の奉まを
と 是れや 船
は 船
を 買
つ
と
ら
て

なる物う女三人「オホ
い免頂裁まもまをせん
ねんごう子且ねんまを
のね換子へともなを
ても商人の足形を
ものてそんまを



似ねんぞい
あゆむねト
のびるあり
まをんのあ
種とのあがが
かす終あんなま

△申し
△あてあまう
△ナニサ船ウ
△ねんごう子
△徳所や

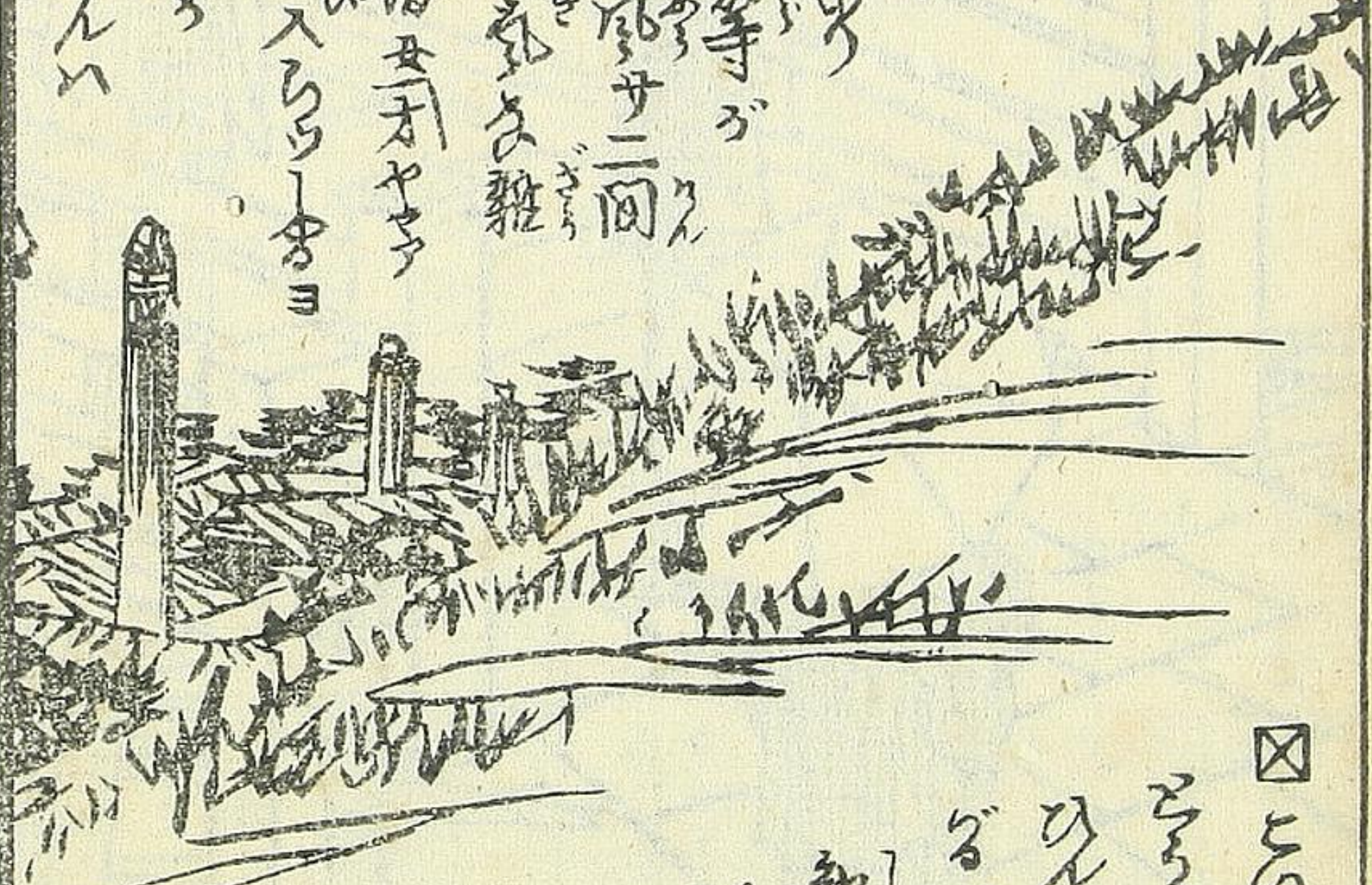
△あてあまう
△ナニサ船ウ
△ねんごう子
△徳所や
△あてあまう
△ナニサ船ウ
△ねんごう子
△徳所や

の身まけをぬやうと
姉さんまねくその女

女オヤノ足郡のわらまき
袈裟の深菊さんいふ
素人あまをわらわらあり

ませらぬわらわらまき
引せらぬ素人の權妻風サニ
巾の約をて千ヨイと小を
後付き權の後の中平権五オヤ

足郡方へ煙をうらうら
オオオオオ 引小煙まのん
女「それらうらうら
淡きくさんい



△とつて可英い
さうく化の波を
ひんむられさるサ
る引くゆ藤い
知世ね人とあつ
る悪事千
里の巻の
如く見開
くけさく
と三個の
面の皮
あらく

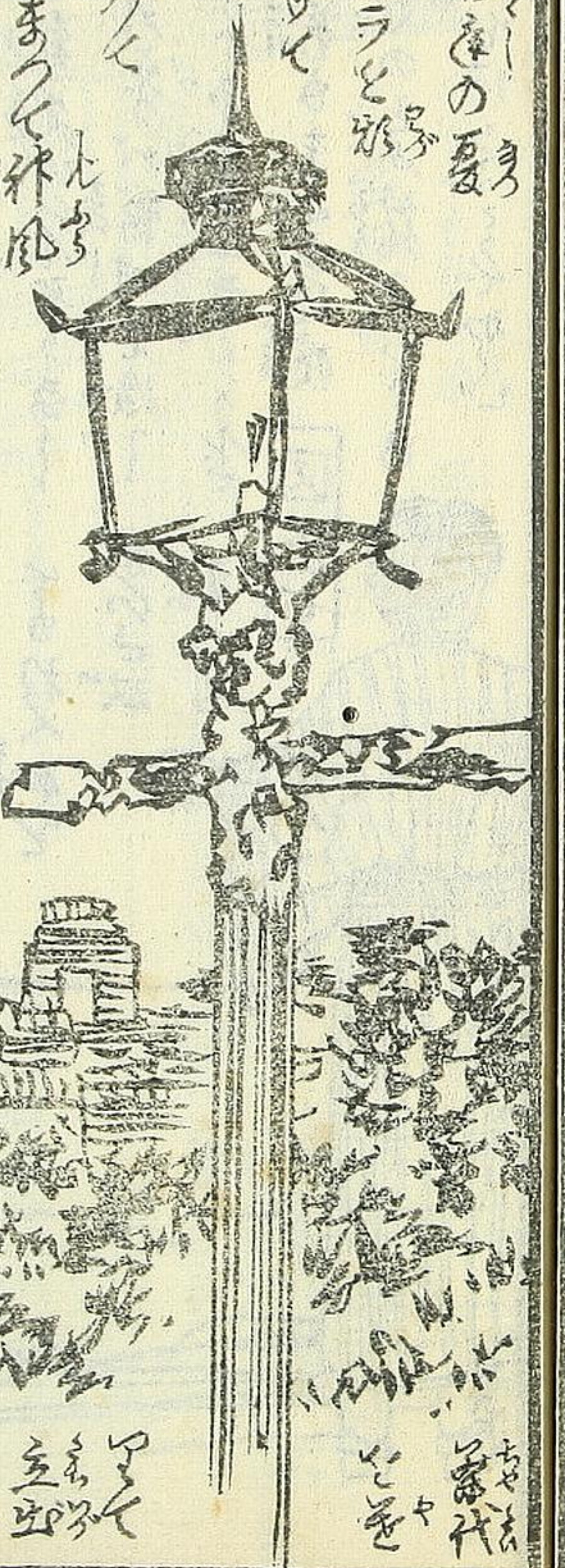
一階の夏
コレラと歌

らりて
死
亡

あまつそ林風
の家を親の

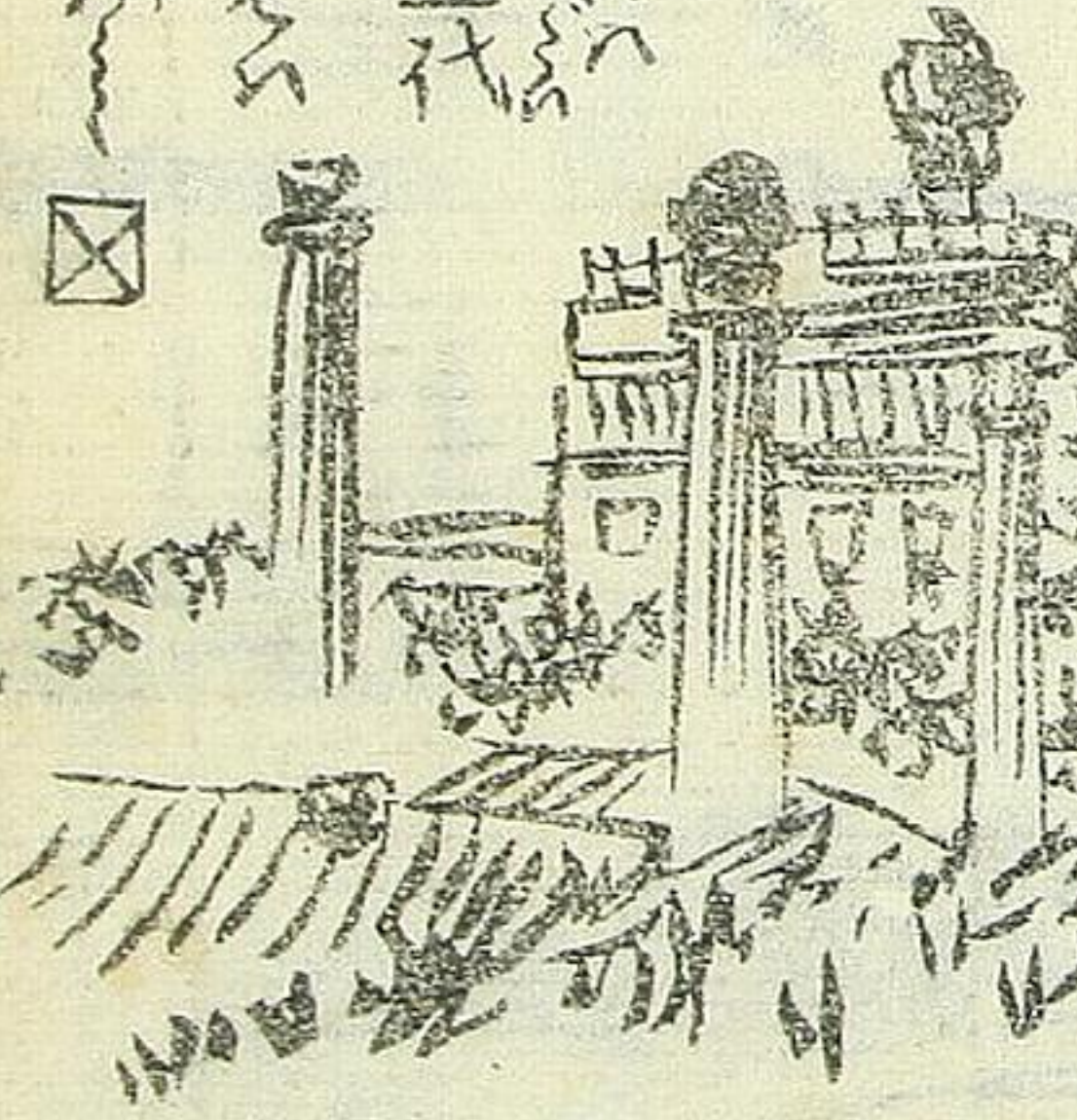
宅へかくつて
花巻るお葬式

をまきまらこのの
をこまらく演習
さんぐ權妻△



△さんごあるら
まきうオオ

めんナニくは深菊
物代ごと等めい二代
用サ女云代用さん
ありませんヨニ入



△
女
水
屋
の
女
人

つゞき 勢とそと女あり ① まうま何と
 うつふまこへつあやいま
 さやうあうい機をん様う
 とあふと寄面はばはじつ
 ふづこひお野花町お掛り
 なる小海面の波新うはして
 ぞあけしき
 面はあやハ暫時を後し
 むぐり寄る云一着うらうんさ
 「昔もまこあは後」
 ぶくのともみ給みくもも
 細とあうふもどかくし

かきさじつ
 元引くもえん
 小の燕乳と吐
 一とそとじと
 ぞおねく和と
 かのこ瓜
 来ハ



面次郎



づの七もまこあ
 女手かづゆ
 あらうら

うら
 女の手
 小の
 せつじ
 勢

「なと付て物を
 多ひおく場あ
 小うるとまわ様
 に團事お知事
 せづ」
 あまうらうんさ

「おと
 気が付
 せりや
 お茶も荒
 る小茶のうけ
 今更の示」

つぎづるコレくはとを被しお入さう

▲運送はのどサア金をと入する

ふあふくあひへでもあふ

の悪い盗

づる七

幸があら

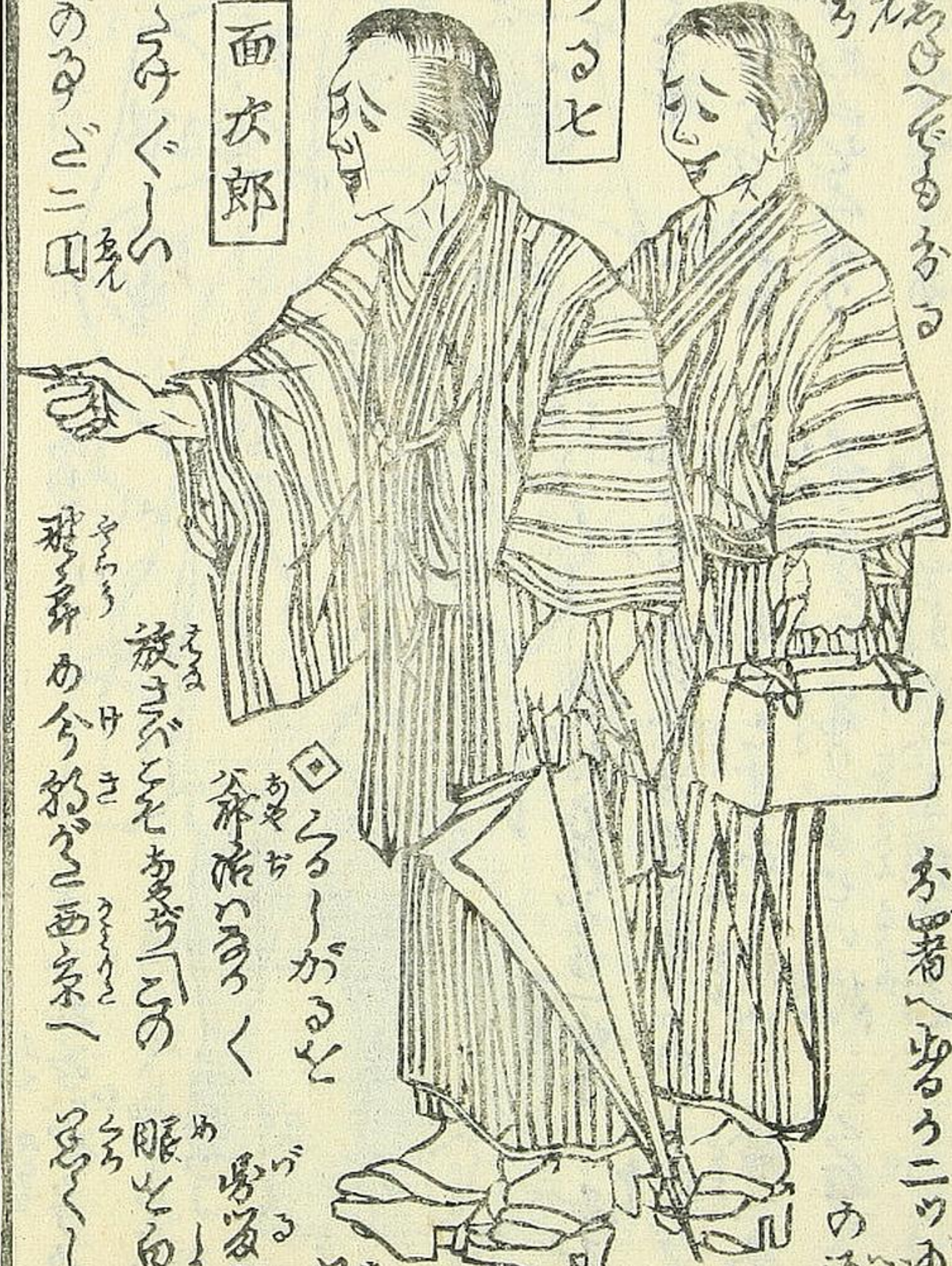
ののうう

あぢが

面次郎

あねくと

たうあめ人のうご二田



お着へ寄う二ツお一ツ

の返講

と

と

と

と

と

と

わけはとあこのとお情

さうううううう

そのあ

向ひ自せ

と

と

と

と

と

と

と

七十歳とあふ大金と借

遣ひをあアかくて

あへあうご

づる

借りこの

傷えんだが文た

のまん中を怒鳴

あううてもあふぢあや

おへうコンサお爺治さん

さうメらさちあや若一

らうて息が借らうが

息が借らうが



おへおサアどうする

さう「ア」若うい

兄を何とあうて

あねお入ナうむくと

と二個が中へ

息が借らうが



招高吟光画

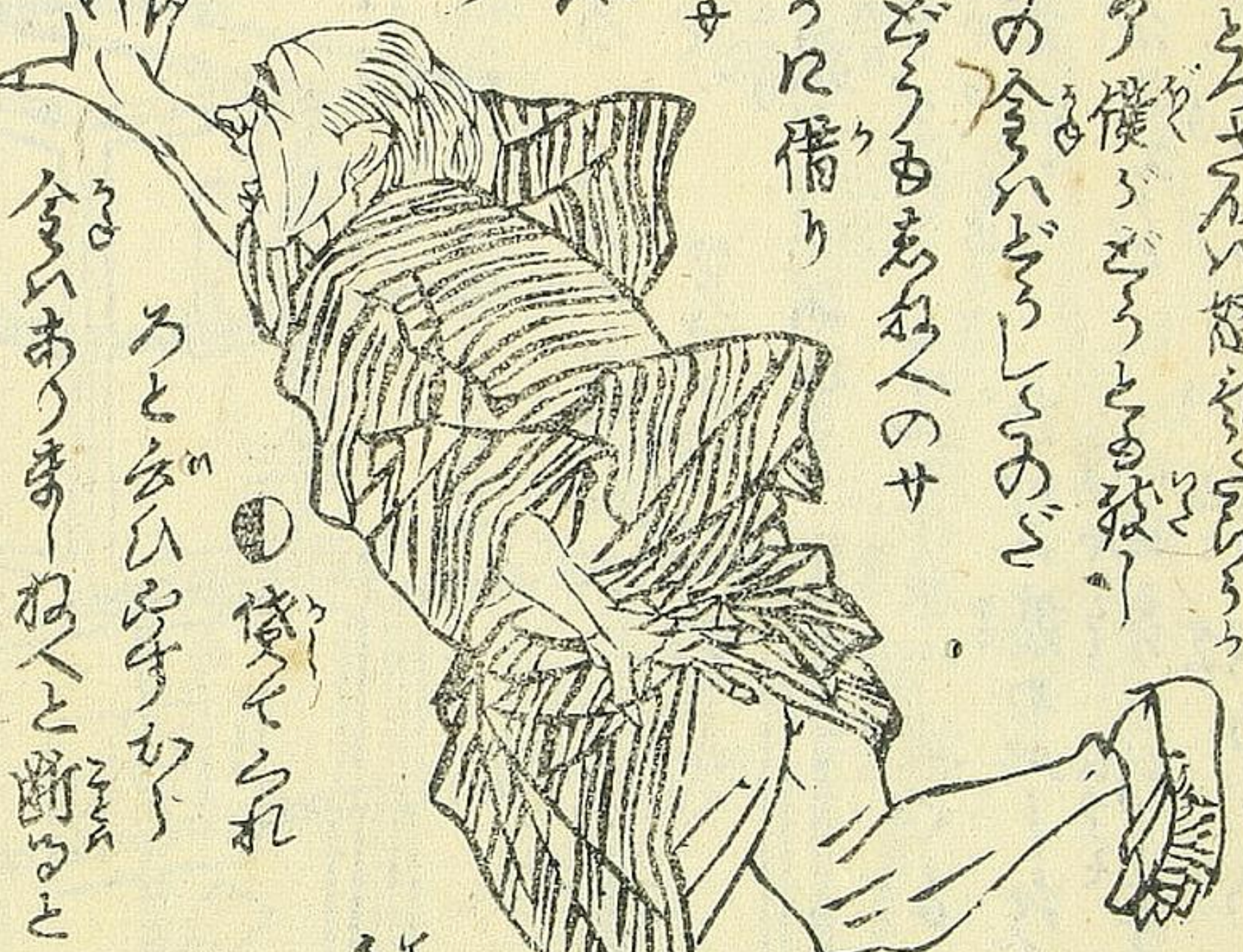
高の解世持

下



のきと云つてはあつたさへいぢれはらう
事とあつたさへいぢれはらう
やせうが全体との金いどうしとのど
あつたさへいぢれはらうのサ
金くははちうに備り
さあお津村の母
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう

あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう



あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう

あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう



あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう

あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう
あつたさへいぢれはらう

かゝるもの今もあつた

かたがたおれ

田舎七

とらふんせひへ

べつとあつた

ちうとち

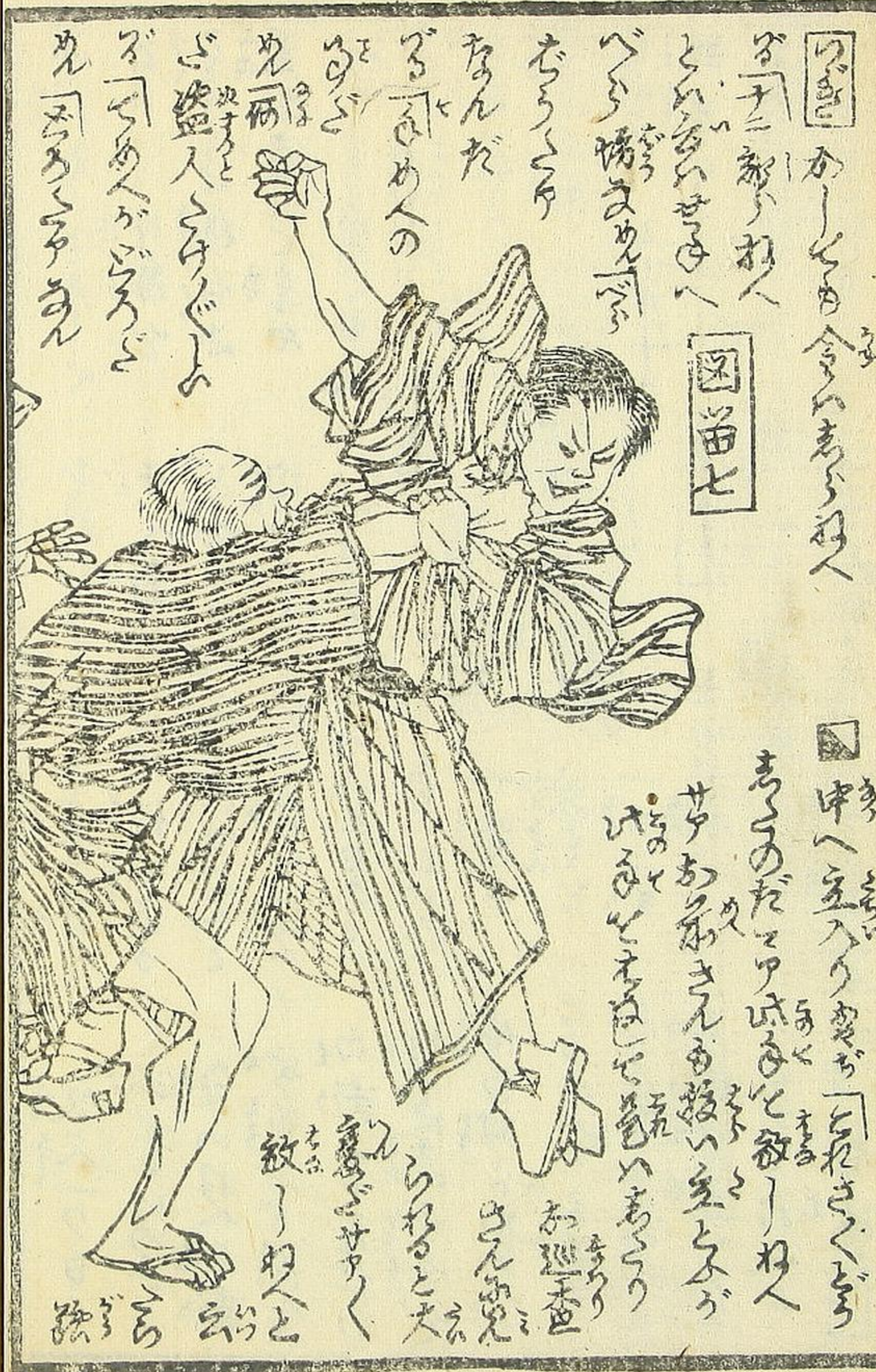
あんだ

ぶらめんの

あつた

ど盗入とけいごよ

あつたあつた



申へ入るうらな

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

だつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

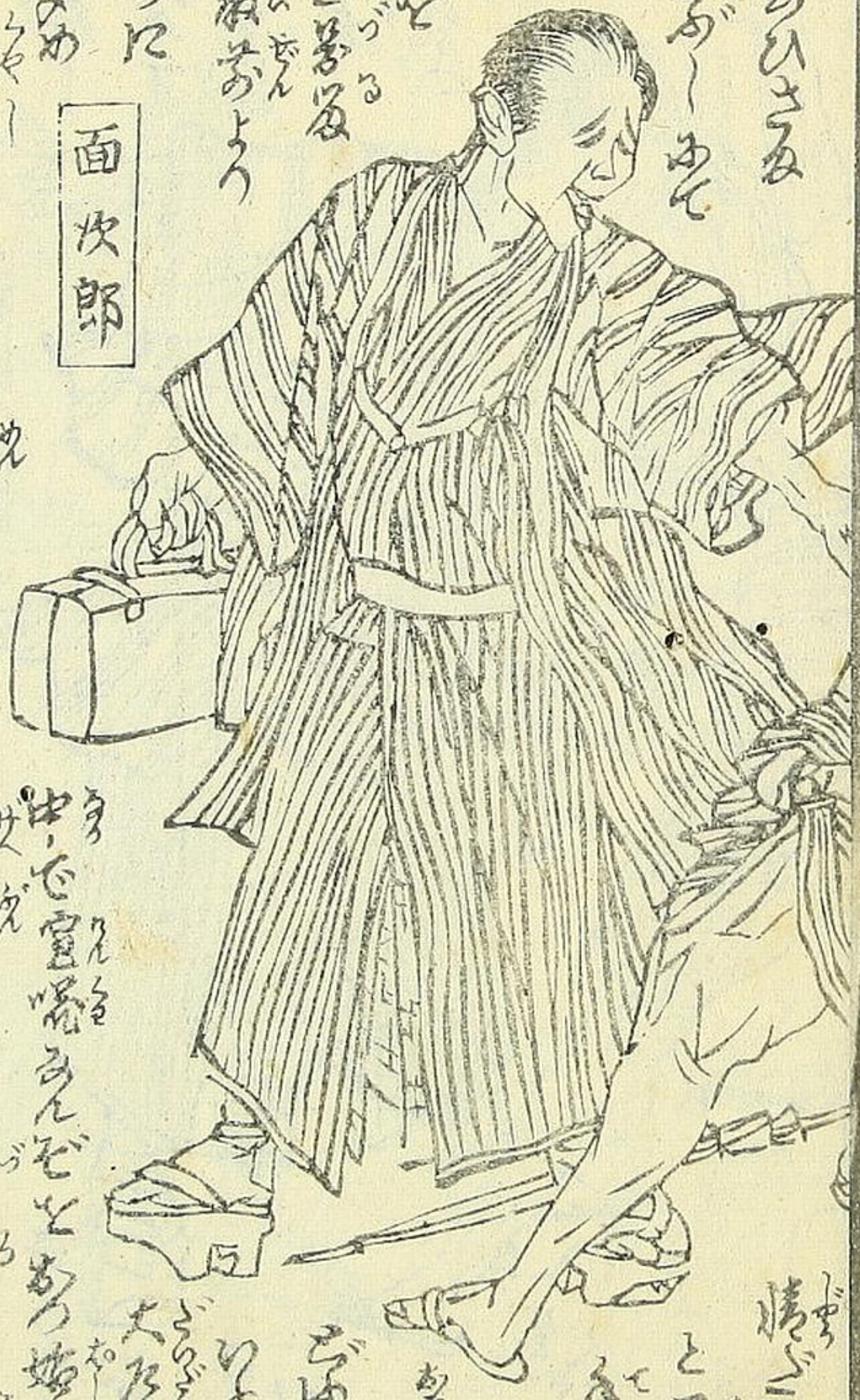
あつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

面次郎



あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

010190525134



